

# 日本を読み解く方法

吉田喜貴

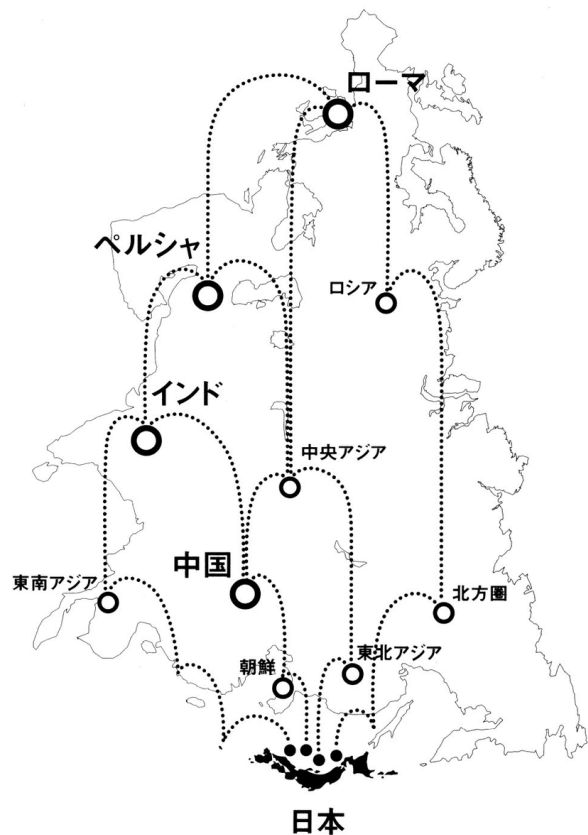
# 日本を読み解く方法

---

- ▶ 文化のたまり場
- ▶ 和魂漢才・和魂洋才の編集法
- ▶ メビウスの輪
- ▶ ちひさきものはみなうつくし
- ▶ 無常への想い
- ▶ 幽玄
- ▶ 引き算の美学
  - ▶ 付録;引き算の美学の具体例

# 文化のたまり場

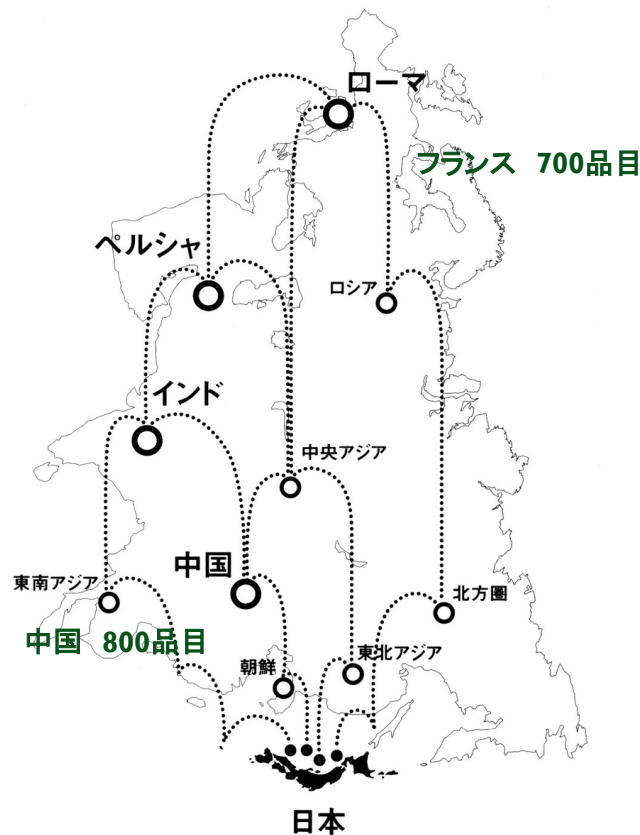
## ▶ 地図を90度回転すると



たとえば



料理に使う食材の数



日本 1,400品目！

# 和魂漢才・和魂洋才の編集法

---

- ▶ 原型は日本語の成り立ち
  - ▶ 古代日本は固有の文字を持たない無文字社会
  - ▶ 中国の漢字の発音と自分たちの発音をつき合わせ、漢字一文字に和音をあてて「万葉仮名」を発明。
  - ▶ 「万葉仮名」を簡略化し、「平仮名(ひらがな)」へ。
    - ▶ こうして生まれた言語だから、外国語の翻訳にめっぼう強い！
- ▶ 渡来の文化に独自の「編集」を加える文化
  - ▶ 日本固有の神と仏教の一体化「神仏習合」
  - ▶ 茶道に潜むキリスト教(狭き門より入れ／聖杯回し飲み)
  - ▶ 箸で食べる「たらこスパゲッティ」

# メビウスの輪

- ▶ 表・裏を分けているようで、本質的には表裏一体。
  - ▶ 具体例
    - ▶ ひらがな・・・漢字(真名)を取り入れたら、ひらがな(仮名)が誕生
    - ▶ 神仏習合・・・「神」と「仏」に優劣をつけず一体化
    - ▶ 和物茶器・・・初期の茶道で唐物が重宝されると、和物が立ち上がる
    - ▶ 主客未分・・・「お客さまは神様」からはじまる主客のあいまいさ
  - ▶ 境界をひかずに、その「間」から創造するのが日本。
    - ▶ ハイブリッド車・・・「これからの車はガソリン車(ディーゼル車)か？電気自動車か？」と欧米が二元論に終始している際に、トヨタがプリウスを発売した。

- ▶ 「あいまいさ」は日本の創造の源！



# ちひさきものはみなうつくし

---

## ▶ 清少納言「枕草子」

- ▶ 幼な子、人形の道具箱、蓮の小さな浮葉、ひよこ、瑠璃の壺など、身の回りの小さなものに「いとうつくし」と喜びをつづるなかで「ちひさきものはみなうつくし」と自身の美意識を語る。

## ▶ 「小ささ」を美とする日本の美意識

- ▶ 小さく産まれて大出世する桃太郎、一寸法師、かぐや姫
- ▶ わずか31文字に想いを凝縮した和歌の世界
- ▶ 中国から伝わった「うちわ」を「扇子」にポータブル化
- ▶ 寺院を小型化した「仏壇」

## ▶ ソニーの「ウォークマン」の背景はここにある？

# 無常への想い

---

- ▶ 仏教とともに伝わった無常感
  - ▶ 日本で初めて無常を説いた聖徳太子「唯仏是真・世間虚仮」
  - ▶ 男女間の恋のはかなさが無常に結びつく
    - ▶ 夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ...「和泉式部日記」
- ▶ 西行(1118~90) 無常と美意識が会う時
  - ▶ 和歌を詠み続けることが、修行であり仏の真理に近づく手段
  - ▶ 数多くの無常を介した「月」と「桜」の和歌を詠んだ
  - ▶ 満ちた月はやがて欠け、咲き誇る桜もやがては散る
- ▶ 限りあるこの世に無限の美を演出したい・・・

# 幽玄

---

- ▶ 花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。
  - ▶ 美しさは「目」でみるのではなく「心」で感じるべき(徒然草)
- ▶ 見渡せば 花も紅葉も なかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮
  - ▶ 幽玄美を代表する藤原定家(1162~1241)の和歌
  - ▶ 後に千利休が茶道の「わび・さび」の美意識に通ずると賞賛。
- ▶ 秘すれば花なり。秘せずは花なるべからずとなり。
  - ▶ 世阿弥(1363~1443)「風姿花伝」のキーワード
- ▶ 目には見えない余情に無限の美がひそむ



# 引き算の美学

---

- ▶ あえて省くことで無限の美を演出する日本文化の手法
  - ▶ ちひさきものへの愛
  - ▶ 無常観→幽玄の美意識 } × 禅の思想 = 引き算の美学
- ▶ 超訳・道元「正法眼蔵」
  - ▶ 無の思想・・・禅の究極目的は「本来の自分に出会うこと」
    - ▶ 自分や他人の心身を所有するという考えを捨てよ(現成公案)
    - ▶ 主観・客観に仕分けする以前の自己を捉えよ(山水経)
  - ▶ 山水思想
    - ▶ 過去・現在・未来を超越した時のその向こうに見える山水こそが仏道の悟りの境地(山水経)
    - ▶ 想像力としての山水が日本の実景と交わる→枯山水庭園

# 付録：引き算の美学の具体例

---

- ▶ 禅以前の引き算の感覚
- ▶ 禅の山水思想「枯山水庭園」
- ▶ 千利休とルネサンス
- ▶ 岡倉天心「茶の本」
- ▶ 日本料理の引き算の美学

# 禅以前の引き算の感覚

---

- ▶ 引き算の美学の源流は「神社」
  - ▶ 神がときおり訪れる際の仮の宿が神社。
  - ▶ 「いる」と感じた時だけ「心」の中に神がいる。
- ▶ 何もないところに何かを感じる美意識
  - ▶ 「おもかげ・なごり・うつろい」を大切にする伝統
  - ▶ 31文字の和歌が世界が広がる感覚
- ▶ 法然(1133～1212)「専修念仏」
  - ▶ 「南無阿弥陀仏」とさえ唱えれば、誰もが極楽浄土へ。

# 禅の山水思想 「枯山水庭園」

- ▶ 枯山水庭園の創始者は禅僧・夢窓国師(1257～1351)
  - ▶ 自然の中に人の有りようを見出そうと庭造りに没頭。
  - ▶ 「山水には得失なし。得失は人の心にある。」夢中間答集57

## ▶ 禅芸術の7要素

1. 不均齊...完全にはない無限の可能性がある
2. 簡素...高度に素朴で単純であることの美しさ
3. 枯高...枯れ長けた強さ
4. 自然...わざとらしさのない本来の美しさ
5. 幽玄...見えない部分に秘められた無限の余韻
6. 脱俗...物事にこだわらない美
7. 静寂...限りない静けさと内に向かう心



【龍安寺・方丈庭園】

水をなくすことで受け手の想像力にまかせる

# 千利休とルネサンス

## ▶ ルネサンスの美意識

- ▶ 人の世界観・可能性を極限まで広げようとした
- ▶ 千利休(1522~99)と同年代の天才たち
  - ▶ レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452~1519)
  - ▶ コペルニクス(1473~1543)
  - ▶ ガリレオ・ガリレイ(1564~1642)

## ▶ 利休の美意識

- ▶ 手の届く範囲にこそすべてがある
  - ▶ 四畳半が基本だった茶室を二畳まで縮めた。
  - ▶ 余計なものを極限まで削る「わび・さび」。

【千利休作と伝わる茶室「待庵」】



# 岡倉天心「茶の本」

---

- ▶ 岡倉天心が英文で世界へ発信（1906年）
  - ▶ 茶道とは不完全なものへの崇拜
    - ▶ “It is essentially a worship of the Imperfect, as it is a tender attempt to accomplish something possible in this impossible thing we know as life.”
  - ▶ 転機は禅の普及
    - ▶ “Since Zennism has become the prevailing mode of thought, the art of the extreme Orient has purposefully avoided the symmetrical as expressing not only completion, but repetition. Uniformity of design was considered fatal to the freshness of imagination.
  - ▶ 本当の美しさは、、、
    - ▶ "True beauty could be discovered only by one who mentally completed the incomplete."

# 日本料理の引き算の美学

---

- ▶ 和洋の料理法の違い
  - ▶ 洋食...食材に様々な味を加えて完成させる
  - ▶ 和食...食材の一番美味しいときに最小限の手を加える
    - ▶ 出汁とフォン・ド・ヴォー
      - 出汁の成分はほとんどが「水」。余計なものは引いた。
      - フォンは様々な食材を加えて作る足し算。
- ▶ 料理法に現れる引き算
  - ▶ お湯のなかに鰹節や昆布の味を「引き出す」出汁作り。
  - ▶ 食材の苦みやえぐみを取り除く「灰汁引き」。
  - ▶ 魚の生臭みを取り除く「湯引き」。